

平成19年度第2回瀬戸内海東部カタクチイワシ漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
瀬戸内海区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2007年7月～8月)

(1) 来遊量：

シラスは平年を下回る。カタクチイワシ(小羽から大羽)は平年を上回る。

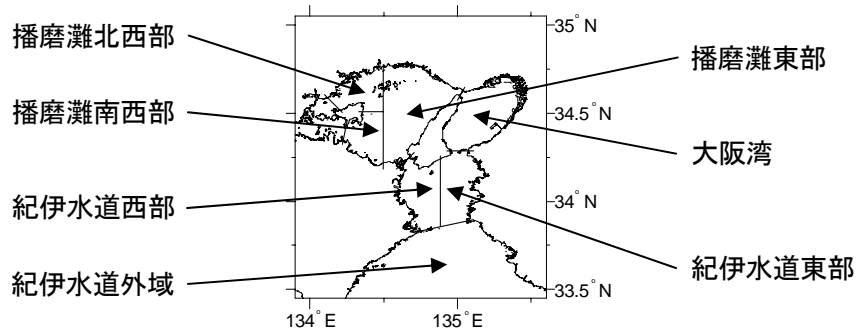
(2) 漁場：

紀伊水道東部では不漁であった2006年を上回り、平年を上回る。

紀伊水道西部では不漁であった2006年を上回るが、平年を下回る。

大阪湾ではシラスは不漁であった2006年を上回るが、平年を下回る。カタクチイワシは好漁であった2006年並みかやや下回り、平年を上回る。

播磨灘では不漁であった2006年、平年を下回る。



問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課 沿岸資源班 担当：大隈、田中、佐藤

〒100-8950 東京都千代田区霞が関1-2-1

電話：03-3502-8111(内線6800)、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

電子メール：yuusuke_satoh@nm.maff.go.jp

独立行政法人水産総合研究センター 瀬戸内海区水産研究所 業務推進部

〒739-0452 広島県廿日市市丸石2-17-5

電話：0829-55-3406、ファックス：0829-54-1216、電子メール：feis-kiren@ml.affrc.go.jp

本予報は水産庁のホームページ (<http://www.jfa.maff.go.jp/release/index.html>)、独立行政法人水産総合研究センターにおける我が国周辺水域資源調査推進委託事業のホームページ (<http://abchan.job.affrc.go.jp/>)、及び瀬戸内海区水産研究所のホームページ (<http://feis.fra.affrc.go.jp/>)に掲載されます。

参画機関

和歌山県農林水産総合技術センター 水産試験場	香川県水産試験場
大阪府環境農林水産総合研究所 水産技術センター	徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究所
兵庫県立農林水産技術総合センター 水産技術センター	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
岡山県水産試験場	独立行政法人 水産総合研究センター 中央水産研究所 瀬戸内海区水産研究所

平成19年度第2回瀬戸内海東部カタクチイワシ漁況予報

1. 今後の見通し (2007年7月~8月)

シラス (本年夏季発生群)

紀伊水道東部では不漁であった2006年を上回り、平年を上回る。

紀伊水道西部では不漁であった2006年を上回るが、平年を下回る。

大阪湾ではシラスは不漁であった2006年を上回るが、平年を下回る。

播磨灘では不漁であった2006年、平年を下回る。

代表漁協のシラス漁獲量から推定した各海域の漁獲量を指標とし (図1~3)、1985~2006年の平均値を平年値とした。

カタクチイワシ (小羽から大羽)

大阪湾では好漁であった2006年並みかやや下回り、平年を上回る。

巾着網標本船の漁獲量を指標とし (図4)、1985~2006年の平均値を平年値とした。

2. 漁況の経過 (2007年5月~6月) および今後の見通しについての説明

(1) シラス漁況

紀伊水道東部では5月の漁獲量は前年の35%、平年の39%であり、前年、平年を下回った。

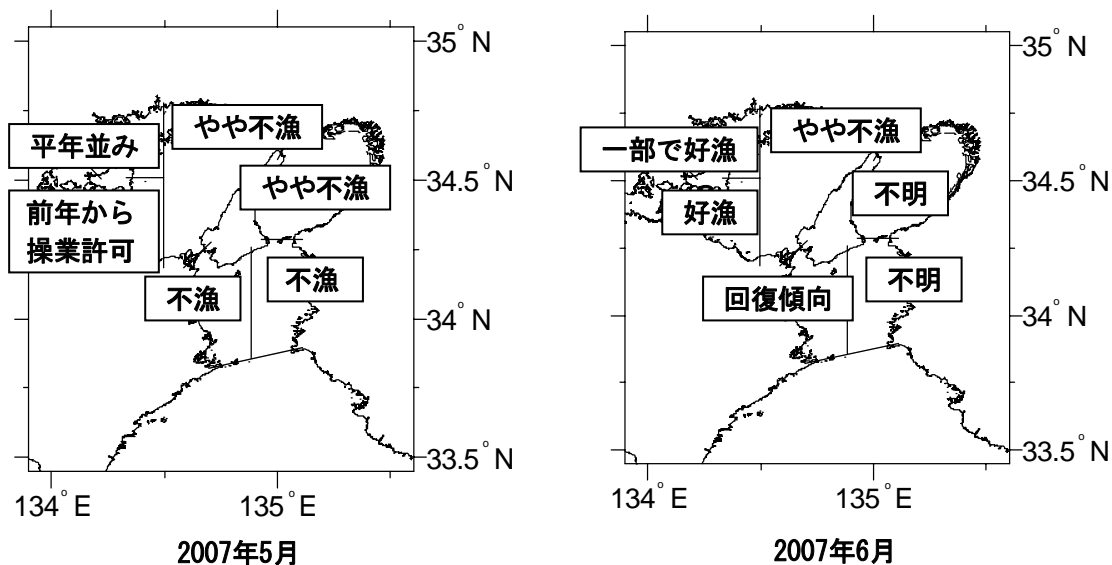
紀伊水道西部では5月の漁獲量は前年の60%、平年の12%であり、不漁であった前年を下回り、1985年以降、2002年に次いで少なかった。6月は12日までに5日間出漁し、漁獲量は35トンであった。6月上旬の漁は低調であったが、11日以降増加傾向にある。

大阪湾では2007年の漁は例年より早い4月中旬に始まった。4月の漁獲量は平年の51%であった (前年の漁獲量は0)。5月は不漁であった前年の309%、平年の86%で前年を上回ったが、平年をやや下回った。例年より早い5月下旬頃から大阪湾内で発生したと考えられる小型の個体が見られ始めた。

播磨灘東部では2007年の漁は5月21日から始まった。5月の漁獲量は平年の80%であった (前年の漁獲量は0)。6月も低調に推移している。

播磨灘南西部では2007年の漁は5月23日から始まった。5月に40トン程度の漁獲があり、6月も比較的好漁が継続している。

播磨灘北西部での岡山県による2007年の漁は岡山県海域の一部 (日生~牛窓沖) で5月18日から始まった。5月は12日間出漁し、漁獲量は約11トンであった。6月は20日までに17日間出漁し、漁獲量は約32トンであった。兵庫県ではほとんど出漁していない。



2007年5月のシラス漁況および2007年6月のシラス漁況

(2) 産卵量

紀伊水道外域東部では5月は前年の74%、平年（1997～2006年の平均値を平年値とした）の9%であったが、6月は前年の185倍、平年の254%となり、前年、平年を上回った。紀伊水道東部では5月は前年の13%、平年の11%であったが、6月は前年の84倍、平年の123%となり、前年、平年を上回った。

紀伊水道外域西部では5月は前年の28%、平年の53%であり、前年、平年を下回った。紀伊水道西部でも5月は前年の80%、平年の40%であり、前年、平年を下回った。

大阪湾では5月は前年の267%、平年の183%であり、前年、平年を上回った。6月は前年の95%、平年の158%であり、前年並みで、平年を上回った。

播磨灘では6月は前年の19%、平年の33%であり、前年、平年を下回った（図5）。

(3) 今後の見通しの説明

シラス（本年夏季発生群）

黒潮は5月中旬と6月上旬に一時的にやや離岸となったが、5～6月はおおむね接岸傾向を示している。この間、紀伊水道外域東部へは暖水波及が継続してみられたが、紀伊水道西部では内海系水の紀伊水道外域への流出が多く見られた。水産総合研究センターにて運用している海況予報モデル（FRA-JCOPE）による予測結果では、今後、黒潮流軸は7月中旬まで現況と変わらないが、それ以降は離岸傾向へと推移していくことが示されている。

紀伊水道外域東部と紀伊水道東部のカタクチイワシ産卵量は5月に前年、平年を下回ったが、6月には前年、平年を上回った。今後、黒潮は離岸傾向になると予想されているものの、紀伊水道東部においても卵が多数採集されていることから加入が期待される。

紀伊水道西部では外海発生群および内海発生群が漁獲されていると推定される。7～8月の漁獲量は、紀伊水道外域東部、紀伊水道および播磨灘の各海域において産卵があり、かつ紀伊水道と播磨灘の6月の水温が低いほど多くなる傾向がある（図6）。播磨灘における2007年6月の産卵量は低水準であったが、紀伊水道東部外域や紀伊水道東部では高水準であった。また水温は平年並みで、前年より低かった。産卵と水温の状況から判断すると漁獲量は前年を上回ると考えられる。

大阪湾では外海発生群が春から引き続き漁獲されるのに加え、内海発生群が6月以降にシラスとして漁獲されるようになる。来遊環境がよい年には好漁年が多いことから、外海発生群の補給の多さが大阪湾の好不漁に影響すると考えられる。今後の黒潮流軸の動向予測から判断すると、大阪湾への外海発生群の来遊は期待できない。しかし、卵の出現状況から大阪湾での発生群は前年、平年を上回ると推測され、これらが加入に成功すれば今後も漁獲が継続すると考えられる。

内海発生群が漁の主体である播磨灘では6月の水温が低いほど7～8月の漁獲量が多くなる傾向がある（図7）。また明瞭でないものの6月の産卵量が多いほど7～8月の漁獲量が多くなる傾向がある（図7）。5月下旬から6月中旬のシラス漁は播磨灘南西部では比較的好漁であったが、2007年6月の水温は高く、産卵量は少ないことから（図5）、漁獲量は前年、平年を下回ると予想される（図8）。

カタクチイワシ（小羽から大羽）

大阪湾では漁期当初は前年発生の子魚、その後は本年の春シラス漁で漁獲の対象となった0才魚が、小・中羽として漁獲される。前年の8月以降に平年を大きく上回る0才魚の漁獲があり、現在も比較的多くの0才魚が滞留していると考えられる。このことと、本年の春シラスの漁況や夏シラスの漁況予測から判断して前年並みかやや下回ると考えられる。

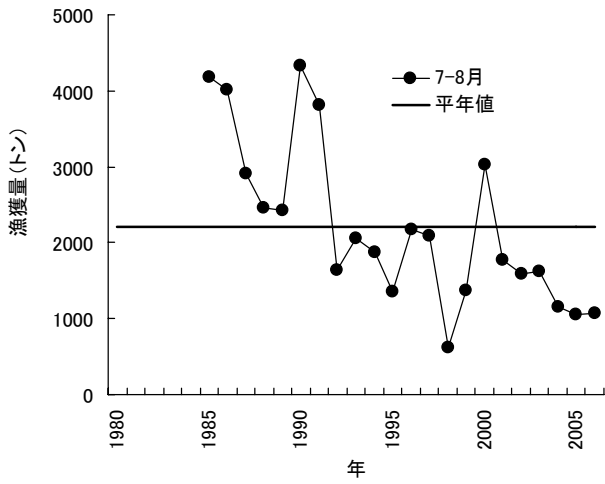


図1 紀伊水道におけるシラス漁獲量

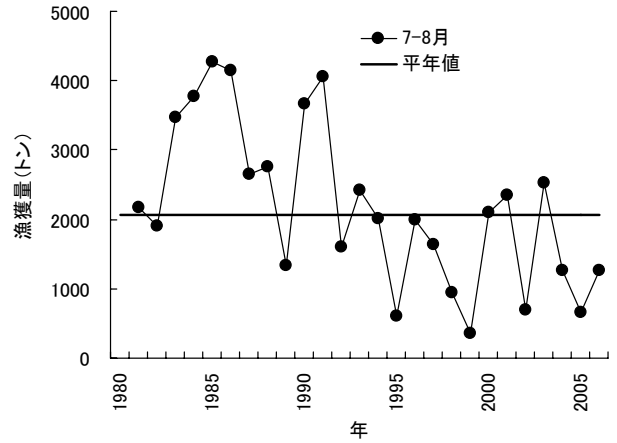


図2 大阪湾におけるシラス漁獲量

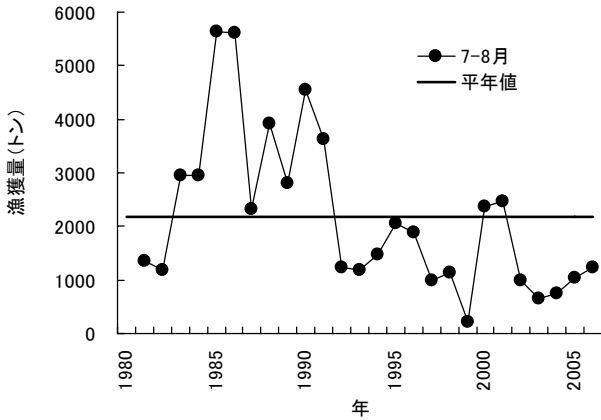


図3 播磨灘におけるシラス漁獲量

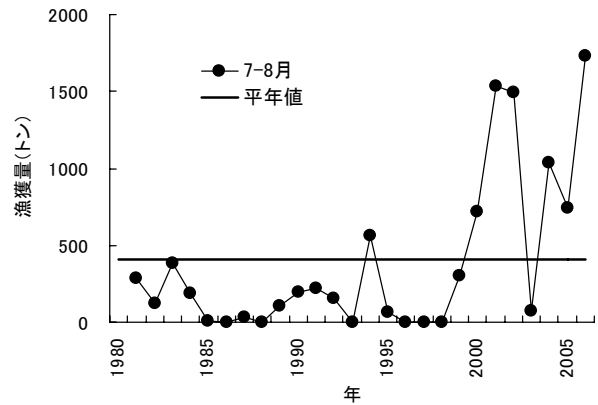


図4 大阪湾における巾着網標本船のカタクチイワシ漁獲量

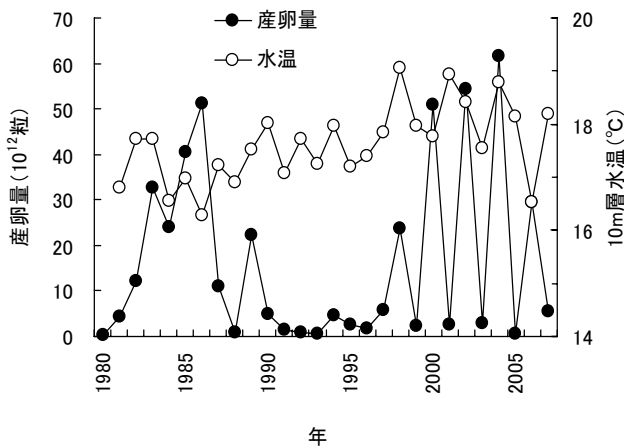


図5 播磨灘における6月の産卵量、10m層水温

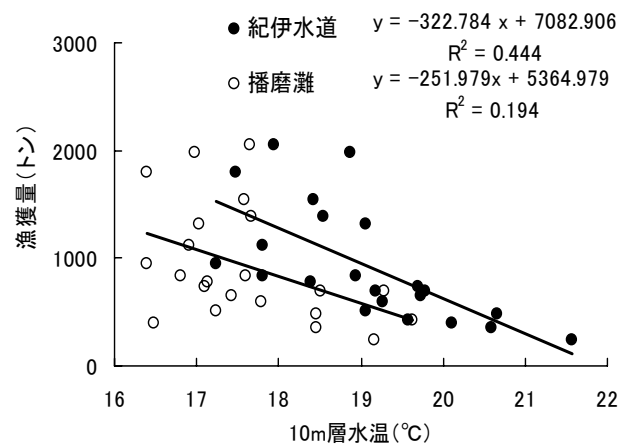


図6 紀伊水道西部と播磨灘における6月の10m層水温と紀伊水道西部における7-8月のシラス漁獲量の関係

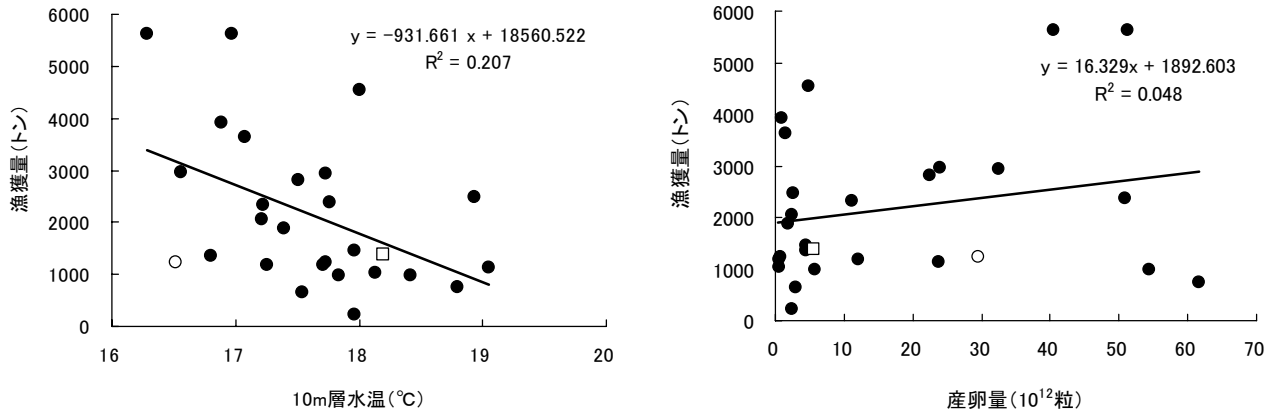


図7 播磨灘における6月の10m層水温と7-8月のシラス漁獲量の関係（左図）および6月の産卵量と7-8月のシラス漁獲量の関係（右図）
 ○は2006年の漁獲量、□は2007年の予測値である。2007年の予測値は産卵量と水温をパラメータとした重回帰分析から求めているため、各図の回帰直線上にない。

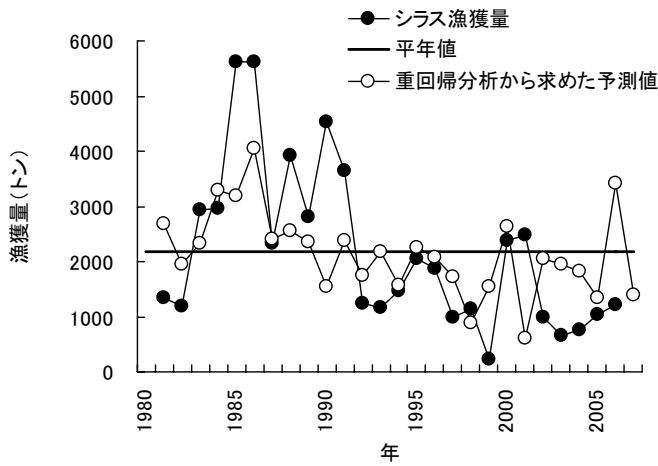


図8 播磨灘における7-8月のシラス漁獲量と重回帰分析から求めた漁獲量の予測値